

2007 年

中堅・中小企業におけるサーバ OS の利用実態

2007 年 6 月

株式会社ノークリサーチ

2007 年中堅・中小企業におけるサーバ OS の利用実態

—目次—

| | |
|---------------------------------|----|
| 『調査要綱』 | 3 |
| 『総括』 | 4 |
| 第 1 章 サーバ OS 利用実態 | |
| 1-1. サーバ OS の利用状況 | 5 |
| 1-2. 利用目的別に見た OS の利用実態 | 6 |
| 第 2 章 Linux 利用実態 | |
| 2-1. Linux の利用状況 | 7 |
| 2-2. Linux の利用用途 | 8 |
| 2-3. Linux を利用しない理由 | 9 |
| 第 3 章 Windows 系 OS の現状分析 | |
| 3-1. 旧 Windows の利用状況 | 10 |
| 3-2. 旧 Windows の移行予定 | 11 |
| 3-3. 旧 Windows の移行予定（企業規模別） | 12 |
| 3-4. 旧 Windows を継続利用する理由 | 13 |
| 3-5. 旧 Windows を継続利用する理由（企業規模別） | 14 |

『調査要綱』

本調査は、中堅・中小企業におけるサーバOSの利用実態を明らかにすることを目的としている。調査方法は全国の中堅・中小企業へのランダムサンプリングで、郵送アンケートを行った。

調査概要

全国の年商5億円以上500億円未満の民間企業約4,000社に郵送アンケートを実施し、有効回答数1,140社を回収。調査時期は2007年1月から3月。

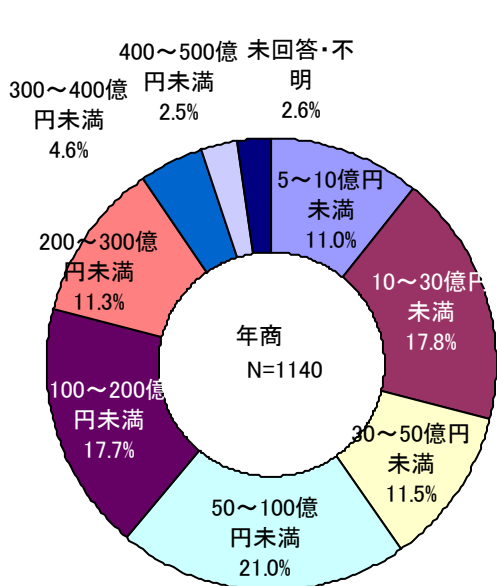


図1. サンプルサマリ (年商)

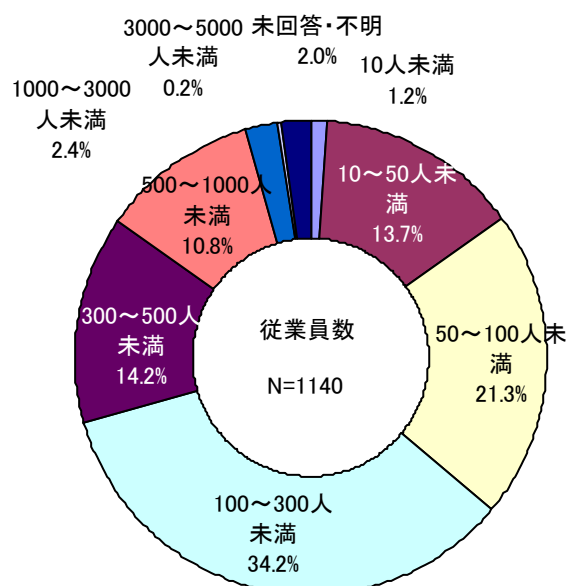


図2. サンプルサマリ (従業員数)

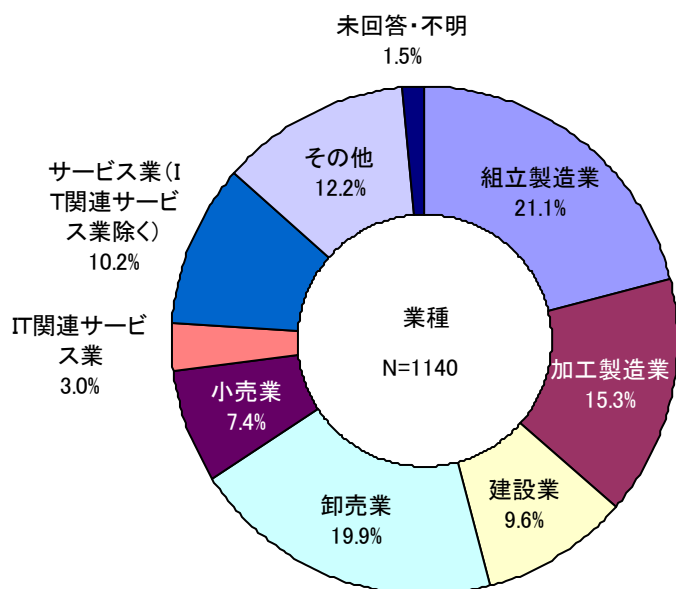


図3. サンプルサマリ (業種)

『総括』

「07 年の中堅・中小企業におけるサーバ OS は、Windows のデファクト状況はさらに高まり、Windows による市場マッピングは完成された。一方 Linux の利用率は一桁台の利用率でほとんど変化なし。」

前回 06 年では「中堅・中小企業市場で利用されているサーバ OS は Windows が主流」と言われている中で、マスコミ、業界誌などを含め OSS（オープンソースソフトウェア）として注目されていた Linux が、どの程度普及が進んでいるかを見極めることと、同時に「Linux は Windows の対抗馬か？」ということを検証する目的を持って調査を行った。結果は「中堅・中小企業のサーバ OS は Windows がデファクトで、Linux は情報系の単機能サーバ OS として Windows と一部分を共存していくとみるのが妥当」という結論で締めくくった。

今回 07 年調査は、有効回答数が 1140 件と前回より 200 件以上増加（回答数の増加はより確かさが増している）する中での結果だ。「中堅・中小企業市場で利用されているサーバ OS は Windows がデファクト」という事実がほぼ確定した。Linux の利用意向はマイナスに傾いている。

今回の中堅・中小企業におけるサーバ OS 分析は、昨年の「Windows VS Linux」という構図分析に加え、「Windows による市場マッピングが完成」したこと、「旧 Windows の Windows2003 へのシフト状況」に焦点を当てて分析を行った。

新旧の Windows のシェア、そして方向を見定めることがフォーカスポイントだ。既にベンダサポート期間が終了している「WindowsNT」や、標準サポート期間が終了し延長サポート期間に入っている「Windows2000」のように、旧バージョンと位置付けられる Windows OS を依然として利用しているユーザが多いことが分かっている。「旧 Windows」ユーザがどう動くのかというのがこの分析のポイントだ。

「旧 Windows 利用企業の 2003 への移行希望率は 4 割を超える」という結果に注目したい。新 OS への着実な移行が進みつつあることを物語っている。しかし同時に「旧 Windows を継続利用が 5 割」という点も特徴的だ。IT リテラシの向上に伴い、旧 OS でも使えるものと判断して利用している場合が多い。

中堅・中小企業が、ベンダサポート期間の停止した機能的に前世代の OS を利用することの危険性やリスク、そして企業のアプリケーション、IT 活用、戦略について理解した上で旧 Windows を利用しているかどうかの問題だ。もし新 OS 移行が必須ならば、「売る側」はユーザ企業に対して正確にその理由やメリットなどを訴求、提案する必要性が高い。

つまり今回調査で、「中堅・中小企業におけるサーバ OS は Windows がデファクト状況」が確定したのと同時に、2003 への移行も順調だが、多くの「旧 Windows」の継続利用という現実も見逃せないのが実態だ。

第1章 サーバOS 利用実態

1-1. サーバOS の利用状況

—Windows が 88.8% と圧倒的だが、その約 5 割は WindowsNT、2000—

中堅・中小企業が導入しているサーバの OS の状況を聞いた結果を見てみよう。図 4 は、06 年と 07 年の経年変化を表している。「Windows デファクト」という図式がほぼ完成した状態となっている。

細かく見ていくと「Windows2000」が 38.5% と最も高い割合で、「Windows2003」が 35.8%、「WindowsNT」が 14.5%。これら「Windows」全体で 88.8% とほぼ独占的な利用率を示している。以下「Linux」が 6.7%、「UNIX」が 1.7%、「NetWare」が 0.1%、「OS/2」が 0.6% となっている。

06 年と比較すると、まず最新 OS 「Windows2003」が 9.9 ポイント増と大幅な伸びを見せているのが目立つ。一方、04 年末でサポート期間が終了した「WindowsNT」は 4.3 ポイント減ではあるが、依然 14.5% の利用率。リリース後 5 年が経過した 05 年 6 月末に標準サポート期間が終了し、延長サポート期間に移行している「Windows2000」も 0.7 ポイント減だが、38.5% の利用率が維持されており、NT の経験から言っても少なくとも延長サポート期間終了に至るまで、この利用率に大きな変化が見られることはないだろう。

一方の「Linux」は 1.2 ポイント増で 6.7% の利用率となったが、大勢に影響を及ぼすほどの変化とは言えないだろう。

「中堅・中小企業のサーバ OS は Windows のデファクト化が厳然たる事実」であることが鮮明であるが、しかし「旧 Windows」の WindowsNT、2000 が半数以上であることも分かった。

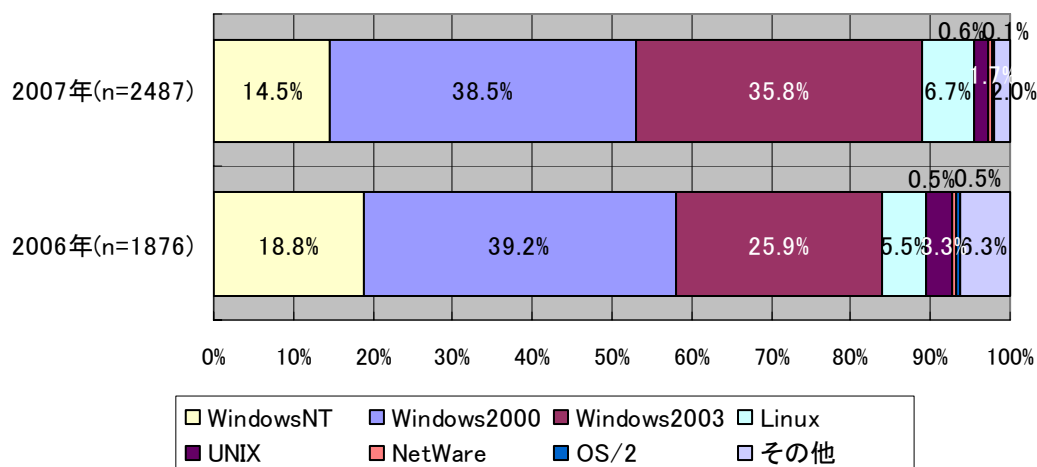


図 4. サーバ OS の種類

—回答企業が自社でメインで利用するサーバ OS の種類を質問

1-2. 利用目的別に見た OS の利用実態

—セキュリティでは Windows2003 が多いが、他分野では旧 Windows が多い—

利用目的別に見た場合の OS の利用結果が図 5.である。

利用目的別に見ても Windows 系 OS の強さは変わらない。特に「基幹系業務システム」、「部門利用」、「データベース利用」では、Windows 系が 9 割を超えている。

Windows 系 OS について細かく見ていくと、「Windows2003」の最も高い利用率は、「セキュリティ、ファイアウォール、バックアップ利用」の 41.5%だ。これらの利用目的のために導入したサーバが近年に多く導入されているためだ。しかし、全般的な傾向として「WindowsNT」と「Windows2000」の旧 Windows の利用率が「Windows2003」よりも高い。

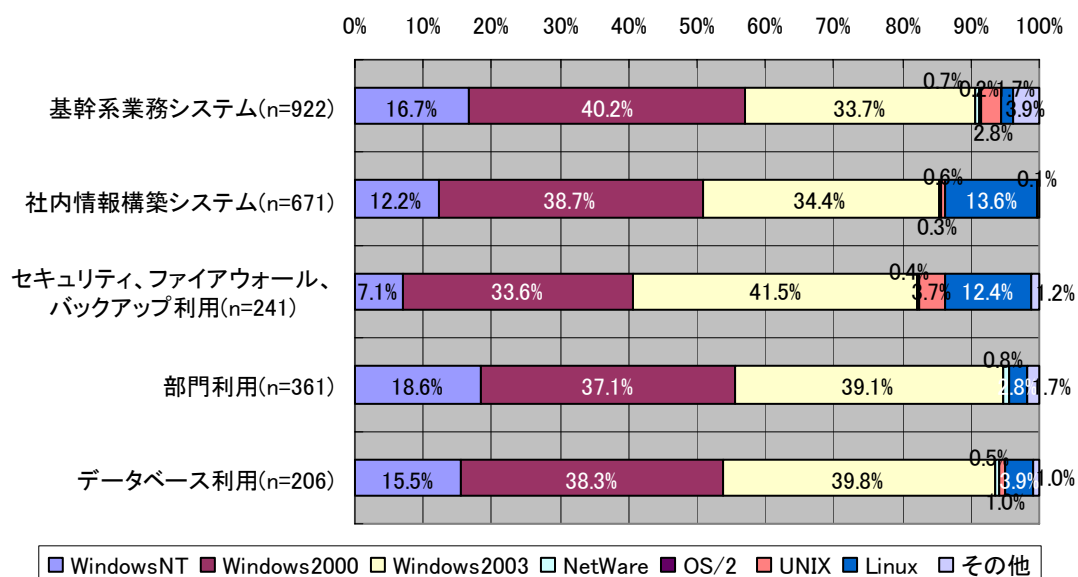


図 5. システム別に見た OS の利用実態

—「サーバ利用目的」と「サーバOS」の質問間クロス集計の結果である

一方、Linux は「社内構築システム」、「セキュリティ、ファイアウォール、バックアップ利用」で、1 割を超えているのみだ。それ以外の分野では、Linux も「その他の OS と同じくくり収束」しつつある。なぜ、Linux は利用されないのか。昨年に続いて、次章で検証したい。

第2章 Linux 利用実態

2-1. Linux の利用状況

—Linux は「使うつもりがない」が 62.8%—

第1章は「導入しているサーバ単位でのOS」の調査結果である。第2章は、「企業全体で利用しているLinux」についての調査結果から、Linuxが普及しない理由を解説する。

図6は、利用用途に関わらず、社内で1台でもLinuxを利用しているか否かを質問した結果である。「すでに使っている」が27.2%、「今後使いたい」は10.0%、「使うつもりがない」が62.8%となっている。

06年との比較で、「すでに使っている」が2.4ポイント増で27.2%となったが、「今後使いたい」は5.5ポイント減で、かつ「使うつもりがない」が3.1ポイント増と、全体としてはLinux利用に対する状況は、ネガティブ感を増している。

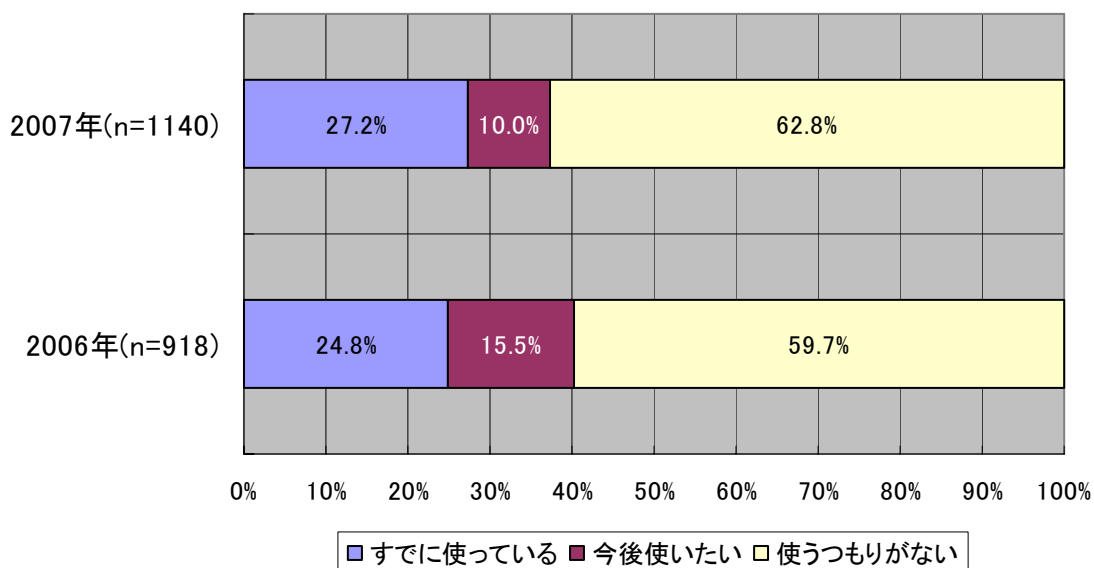


図6. Linux の利用状況

—利用用途にかかわらず社内で1台でもLinuxを利用しているか否かを質問

2-2. Linux の利用用途

—「メール、Webサーバ」が67.4%、単機能サーバとしての利用が目立つ—

続いて、Linuxサーバの利用用途を質問した結果が図7.に当たる。06年同様、07年も「メール、Webサーバ」が圧倒的で67.4%、次いで「ファイアウォールサーバ」25.7%、「データベースサーバ」17.8%、「業務サーバ」16.4%と続く。

昨年と比べても利用用途に大きな変化はない。依然として、メール、Web系などの「単機能サーバ」としての利用に集中している。その理由は、パッケージの有無が利用動向に大きく影響を与えることは明らかで、Linuxのアプリケーションの多くがメール、Webなどの情報系に集中しているからだ。

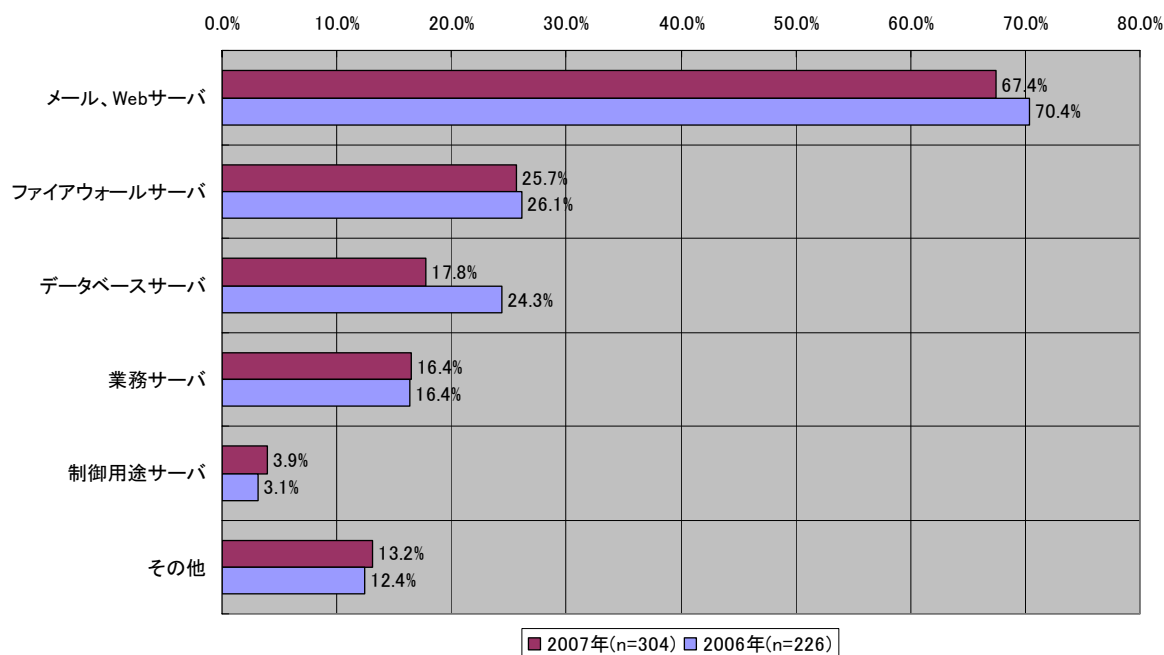


図7. Linuxサーバの利用用途

—Linuxサーバの利用用途を質問

2-3. Linux を利用しない理由

—「技術者不足」が55.8%、「現状で満足」と「サービス/サポートへの不安」が続く—

Linux については依然として中堅・中小企業の多くが利用する気配を見せないが、なぜLinux は利用されないのか。図8.は「Linux を使うつもりがない」と回答した企業にその理由を回答してもらった結果を示している。

Linux を利用しない理由は「社内でわかる人がいない」が55.8%と最も多く、「今使用しているOSに満足している」が38.8%、「サービス/サポートが不安」が34.0%、「実績が少なく不安」が22.2%、「アプリケーションが少ない」が21.2%、「Windowsのほうが良いと思うから」が19.3%。「安定性に問題がある」は5.9%と少ない。

06年同様、技術者不足が第一の理由として挙げられているが、逆に「Linuxを理解している」スタッフを確保できればLinuxを使うのか、という意味ではそう単純ではない。「今使用しているOSに満足している」が38.8%あり、そのOSのほとんどがWindowsである。それに「Windowsのほうが良いと思うから」の19.3%を加えると、5割を超える。「技術者不足」だけではなく、同様に「Windowsの満足度の高さ」もLinuxが普及しない要因となっている。

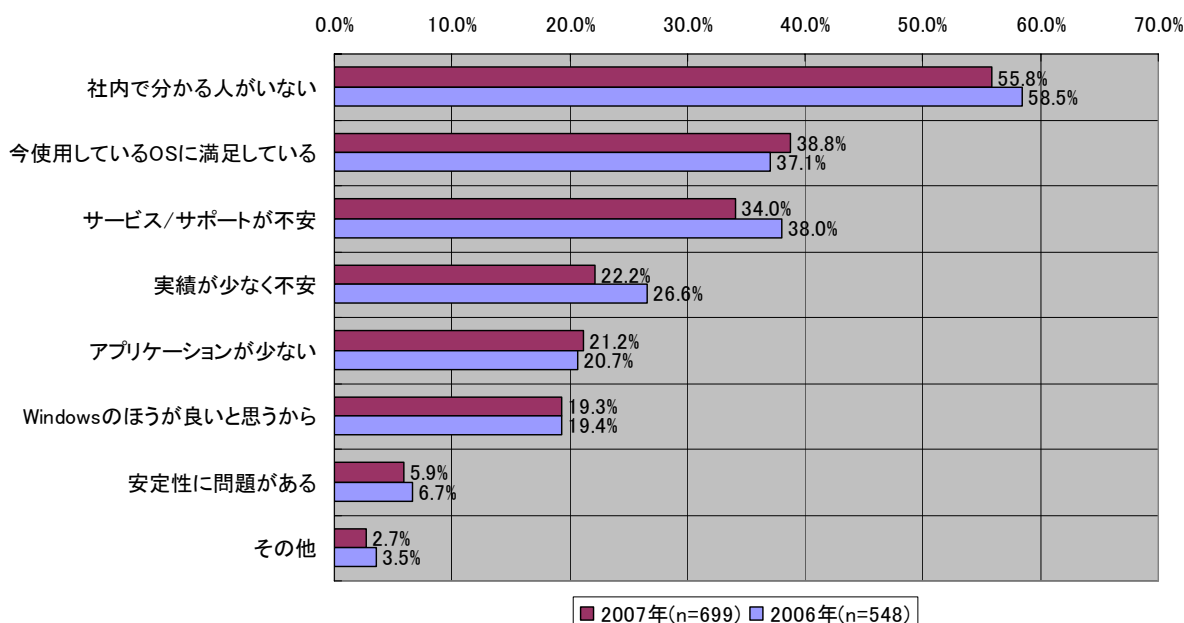


図8. Linux を使うつもりがない理由

—Linux 利用状況の質問で、「使うつもりがない」と回答した企業にその理由を質問

第3章 Windows系OSの現状分析

3-1. 旧Windowsの利用状況

—8割以上がWindowsNT、2000を利用している—

第3章からは「企業全体（会社のどこかの部門で1台でも可）で利用しているWindowsOS」についての調査結果を述べる。分析のポイントは旧Windowsである「WindowsNT、Windows2000」の利用実態と今後の2003への移行割合だ。

図9は、旧Windowsを利用しているか否かを質問した結果である。

「旧Windowsを使っていない」が18.0%、「WindowsNTを使っている」が21.8%、「Windows2000を使っている」が50.1%、「WindowsNTとWindows2000どちらも使っている」が10.1%となっている。

実質的に中堅・中小企業のメインOSは「Windows2000」で、50.1%という約半数の高い利用率となっている。ついで「WindowsNT」21.8%、さらに「WindowsNT・Windows2000両方使っている」10.1%を加えると「旧Windows」は全体の8割を超える。この多数の「旧Windows」が今後どのように移行するのかは次項で解説しよう。

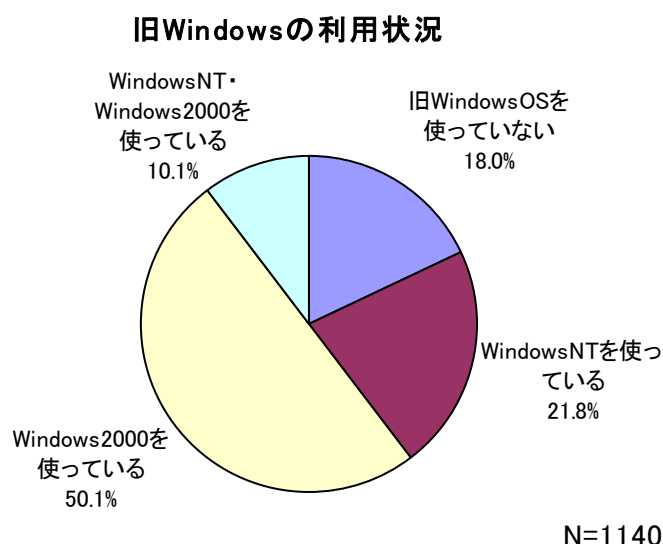


図9. 旧Windowsの利用状況

—「WindowsNT,2000」を利用しているか否かを質問

3-2. 旧 Windows の移行予定

— 「Windows2003 に移行する予定」が 43.6%、「そのまま使う」は 5 割—

図 10.は、旧 Windows を利用している企業に今後の OS 移行計画を質問した結果である。

その結果は、「そのまま使う、使いたい」が 51.9%、「Windows2003 に移行する予定」が 43.6%、「UNIX に切り替える予定」が 0.4%、「Linux に切り替える予定」が 1.7%となっている。

「Windows2003 への移行は順次進んでいる」という傾向は間違いない。1 章で述べたように、Windows2003 の部門別の利用率は 2006 年から 2007 年にかけて約 10 ポイント上昇して 35.8%になっている。また、「Windows2003 に移行する予定」の企業が 43.6%と高い。その相当数が実際に移行することになるので、来年の調査では Windows2003 の部門別の利用率が 5 割を超えることになるだろう。

ただし、「旧 Windows をそのまま使いたい」割合も 50%を超えている事実にも注目したい。新 OS がリリースされているにも関わらず、旧 OS を使い続けるという理由は何か？

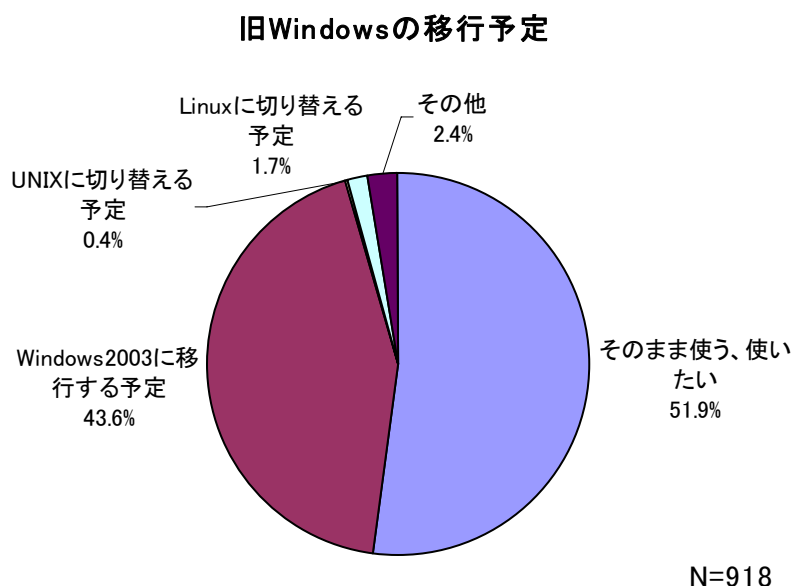


図 10. 旧 Windows の移行予定

— 「WindowsNT,2000」を利用している企業に今後の OS 移行計画を質問

3-3. 旧 Windows の移行予定（企業規模別）

—特に年商 10 億円未満の企業では 6 割以上が「そのまま使う、使いたい」—

図 11.は、「旧 Windows の移行予定」を企業規模別に集計した表だ。

旧 Windows の移行計画については企業規模と相関関係にあることがわかる。「そのまま使う、使いたい」は 10 億円未満の企業では 62.1%であるのに対し、100 億円以上では 46.6%となる。逆に「Windows2003 に移行する予定」は 10 億円未満では 31.6%だが、100 億円以上では 48.6%となっている。UNIX や Linux は企業規模に関係なく移行予定にない。

10 億円未満企業はサンプル数がやや少ないが、規模の小さい企業ほど旧 Windows を今後も使い、Windows2003 への移行に消極的な傾向が出ている。IT 予算の少ない小規模企業はやはり移行には控え気味の傾向だ。相対的に IT 予算に余裕のある 100 億円以上の大規模企業は「Windows2003」への移行予定が高くなっている。

| | N | そのまま使う、使いたい | Windows2003に移行する予定 | UNIXに切り替える予定 | Linuxに切り替える予定 | その他 | |
|----|------------|-------------|--------------------|--------------|---------------|------|-------|
| 年商 | 10億円未満 | 95 | 62.1% | 31.6% | 1.1% | 3.2% | 2.1% |
| | 10～100億円未満 | 448 | 54.7% | 41.7% | 0.2% | 1.3% | 2.0% |
| | 100億円以上 | 352 | 46.6% | 48.6% | 0.6% | 2.0% | 2.3% |
| | 未回答・不明 | 23 | 34.8% | 52.2% | 0.0% | 0.0% | 13.0% |
| 合計 | 918 | 51.9% | 43.6% | 0.4% | 1.7% | 2.4% | |

図 11. 旧 Windows の移行予定（企業規模別）

—「WindowsNT,2000」を利用している企業に今後の OS 移行計画を質問

3-4. 旧 Windows を継続利用する理由

— 「移行する必要性を感じない（まだ十分に使えるから）」が6割以上—

「旧 Windows を使い続ける」と回答する理由はどこにあるのか？それを図 12. で示している。

「移行する必要性を感じない（まだ十分に使えるから）」が63.3%と圧倒的、「移行作業が大変」が29.9%、「移行した後、正常に動作するか不安」が25.1%、「予算がない」が23.6%となっている。結果は経年で見ても大差はない。

サポートが停止した（もしくは停止時期が迫っている）OS をユーザは「移行する必要性を感じない」と考えている。現在も十分に稼動していることに加え、ユーザ自身のITリテラシの向上に伴い古くから使い慣れた OS であるから「サポートがなくても使える」という判断だ。

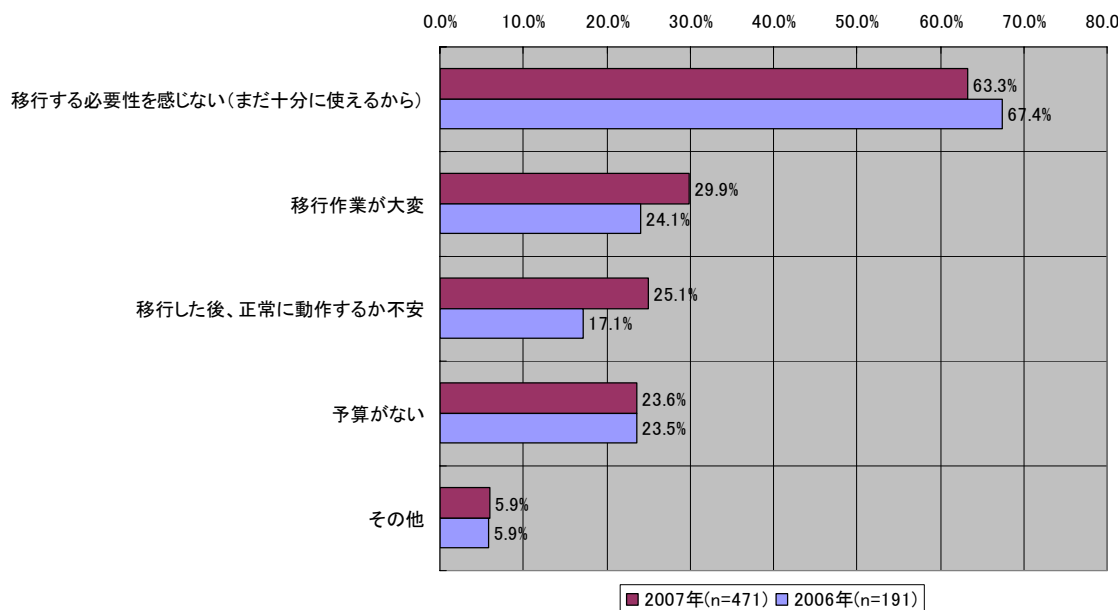


図 12. 旧 Windows を継続利用する理由

—07 年は「WindowsNT,2000」を、06 年は「WindowsNT」を旧 OS と定義し、それをサーバ OS として利用する理由を質問

3-5. 旧 Windows を継続利用する理由（企業規模別）

— 小規模企業は「予算がない」、大規模企業は「移行作業が大変」に傾向見える —

上記の 2007 年の結果について、さらに企業規模別に集計した図 13. を見てみよう。

全体集計でも回答の約 6 割を占めていた「移行する必要性を感じない（まだ十分に使えるから）」傾向は、企業規模に関わらず同じような結果となった。しかし、他の項目別には企業規模の大きさに有意差が見える。

10 億円未満の企業では、「予算がない」が 32.2%、「移行作業が大変」が 23.7%となっている。10～100 億円未満の企業では、「予算がない」が 23.1%、「移行作業が大変」が 29.3%。100 億円以上では「予算がない」が 21.6%、「移行作業が大変」が 33.3%となっている。

10 億円未満の規模の小さな企業では「予算がない」ことによる要因が、100 億円以上では「移行作業が大変（管理台数が多いため）」という傾向がみえる。しかし、総体としては「移行する必要性を感じていない（まだ使えるから）」ことが、Windows2003 への移行にフルシフトしない理由だ。

最後に、中堅・中小企業がベンダサポート期間の停止した、機能的に前世代の OS を利用することの危険性やリスク、そして企業のアプリケーション、IT 活用、戦略について理解した上で旧 Windows を利用しているかどうかが問題だ。もし新 OS 移行が必須ならば、「売る側」はユーザ企業に対して正確にその理由やメリットなどを訴求、提案する必要性が高い。

| | N | 予算がない | 移行作業が大変 | 移行した後、正常に動作するか不安 | 移行する必要性を感じない(まだ十分に使えるから) | その他 | |
|----|------------|-------|---------|------------------|--------------------------|-------|-------|
| 年商 | 10億円未満 | 86 | 32.2% | 23.7% | 20.3% | 64.4% | 5.1% |
| | 10～100億円未満 | 352 | 23.1% | 29.3% | 24.4% | 62.8% | 5.8% |
| | 100億円以上 | 249 | 21.6% | 33.3% | 27.8% | 65.4% | 5.6% |
| | 未回答・不明 | 9 | 12.5% | 25.0% | 25.0% | 25.0% | 25.0% |
| 合計 | 696 | 23.6% | 29.9% | 25.1% | 63.3% | 5.9% | |

図 13. 旧 Windows を継続利用する理由（企業規模別）

— 「WindowsNT,2000」を継続して利用する理由を質問